

言語と認知

東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻: 横山 真樹

e-mail: BZH00551@niftyserve.or.jp

1. はじめに

言語とは何か？言語は一般的な認知能力を利用しているのか、それとも独自の機構をもつ別個のモジュール的システムなのか？この問いにどのように答えるかで、将来の言語研究の方向が決まる。また、言語に関する知見が他の認知一般の研究に採用されうるかが決まる。つまり、言語が一般認知能力から独立しているとすれば、言語研究は他の学問分野における研究成果を考慮することなく、他の学問分野への責任も負うことなく、独自の道を歩んでゆくことになる。一方、言語が一般認知能力を利用しているとすれば、言語研究は認知一般に関する関連諸分野における研究成果を採用し、自らも関連諸分野に対し貢献してゆくという学際的な道を歩んでゆくこととなる。

言語をどのようなものとみるかについて異なる立場をとる二つの理論がある。1957年に Noam Chomsky によって提案されて以来言語学の主流となってきた生成文法と、それに対立する理論として近年発達がめざましい認知言語学である。両者の相違については後で詳しく検討するが、ここで簡単に説明しておこう。代表的な両者の相違は、生成文法が、言語を一般認知能力から独立した別個のモジュール的システムで、数学的な形式的規則と原理から構成される体系として捉えるのに対し、認知言語学では、言語を一般認知能力を基盤とし、言語主体である人間の認識のメカニズムを反映するダイナミックな体系として捉えている。

どちらの立場をとるかは個々の研究者の興味・関心によるが、言語の本質は何か、という重大な問題に関わるだけに安易に決められるものではない。たとえ単なる研究戦略として認知的な複雑な要因を切り離して言語を分析するという方法をとったとしても、それ自体は問題無いが、言語の本質をどうみるかという問題から逃れることはできない。

特定の理論に依拠しない人間が、初めて「言語とは何か」という問題を突き付けられれば、おそらく「伝達的手段」「何かを表現するためのもの」と答えるであろう。そして、「言語の本質は形式的な規則と原理から構成される体系である」と言われれば抵抗を感じるに違いない。なぜなら、人間は何の思考を表現することなく言語を使うことは

ないからである。このような言語観はあくまで直観によるものであるが、このような直観を全く無視して言語理論を構築することはできない。本稿では、より直観に見合った認知言語学的言語観に立ち、生成文法的言語観の問題点を指摘し、なぜ認知的理論が必要なのか検討する。また、最後に認知言語学の中に互いに異なる複数の枠組みがあることについて触れるが、その枠組みそれぞれを認知言語学と認めるとすれば、本稿で私がつとる立場はあくまでその内の一つであり、私が最も認知言語学の真髄を保持する理論と信じるものである。

2. 生成文法的アプローチ

2.1. 概観

生成文法は Chomsky によって 1957 年に提唱されて以来現在にいたるまでめまぐるしくモデルチェンジを繰り返しており、最近のモデルになるほどより抽象的な議論が行われる傾向がある。初期のチョムスキー理論は現在のものとはかなり違っているのは事実ではあるが、基本的な精神は今日まで一貫して変わっていない。

生成文法の基本的精神に二重のモジュラリティーの考え方がある。つまり、生成文法では「一般認知能力を全く利用しない自律的言語能力」の存在を当然のものとしている。この前提は、生成文法の真髄である「文法は意味から自律した形式的な規則・原理からなる形式的体系である」という考え方の基盤となっている。これらは生成文法の理論を維持するために必要不可欠な前提となっている。

この文法が意味から自律しているとする考え方は、初期には単なる研究戦略として採用されたと考えられる面が、次のようなチョムスキーの見解からみてとれる：

Meaning is a notoriously difficult notion to pin down. If it can be shown that meaning and related notions do play a central role in linguistic analysis, then its results and conclusions become subject to all of the doubts and obscurities that plague the study of meaning, and a serious blow is struck at the foundations of linguistic theory. (Chomsky 1955: 141)

このような意味に対する考え方を、西村 (1992: 82) では "fear of meaning" と呼んでいる。意味のような科学的・実証的な分析の困難なものを研究対象に含めることを避けた

ものと考えられる。このような姿勢が賛成しうるものかどうかはともかくとして、研究戦略としてこのような考え方を採用しているというのであればある程度理解はできる。しかし、実際には多くの生成文法論者は、単なる方法論のレベルを越えて、言語が本来そのような性質を備えたもの、つまり文法は意味を考慮することなく論じることのできる純粋に形式的な体系であると信じているようである。それは次のようなチョムスキーの言葉からもみてとれる：

It seems to me fair to conclude that although there are, no doubt, systematic form-meaning connections, nevertheless the theory of formal grammar has an internal integrity and has its distinct structures and properties ... It seems to me reasonable to adopt the working hypothesis that the structures of formal grammar are generated independently, and that these structures are associated with semantic interpretations by principles and rules of a broader semiotic theory. (Chomsky 1977: 57)

2.2. 言語能力の自律性とその問題点

坪井（1993: 80）では、言語能力の一般認知能力からの自律性を生成文法が主張する際の根拠とされる次のような議論に対して、適切な批判がなされている。まず、言語能力の自律性に関する根拠は典型的には次のようなものである：

The case for the autonomy of formal grammar has received support from the fact that (in extraordinary cases) linguistic abilities may be dissociated developmentally from other cognitive abilities. The most dramatic (and best-known) example of this phenomenon involves Genie, the girl who underwent extreme isolation and deprivation until she was thirteen and a half years old ... While Genie's utterances were, even a decade after her release, largely made up of simple noun phrases, she had by then "well-developed use of gesture, facial expression, eye gaze, attention-getting devices, and turn-taking knowledge" (Curtiss 1982: 287). In Curtiss's view, "This case, then, supports the hypothesis that there are language-specific learning mechanisms and suggests that these

mechanisms may be responsible for the learning of syntax in particular”(Curtiss 1982: 292). (Newmeyer 1983: 12-13)

つまり、他の認知能力から分離して言語能力だけが選択的に阻害されることがあるから、言語能力は他の認知能力から自律していると考えられる、という議論である。これに対し、坪井（1993: 80）では次のように問題点が指摘されている：

選択的に阻害されているその言語能力を司るモジュールがあるということと、そのモジュールに表象されている言語知識が他の認知能力の基にある知識と本質的に異質なものであるかどうかということは、論理的に独立のことでありうるものと思われる。複雑な機能を果たす機械の中である機能がある部品によって担われているからといって、その部品の中のメカニズムが別の機能を果たす別の部品の中のメカニズムと全く異質であるということにはならないであろう。

つまり、言語能力だけが選択的に阻害されるとしても、そのことは言語能力が一般認知能力から自律しているという仮説を支持しないのである。

さらに、生成文法では言語能力の生得性が主張されている。生成文法の入門書において、この仮説は次のように紹介されている：

The problem here is that, as far as we can tell, the linguistic data to which children are exposed are not by themselves sufficient to account for the development of the adult competence. Native speakers, in other words, know things which they could not possibly have learned from the language spoken around them. ... There are many other aspects of linguistic competence which do not seem to be learnable from ordinary linguistic data in the child's environment. The conclusion to be drawn from this is that the child does not come empty-handed to the task of language acquisition. In other words, the initial state of linguistic competence has a role to play as well.
(Cowper 1992: 5)

要するに、人間が生まれてから成人になるまでに習得する言語知識がすべて後天的に身につけられたとは考えられず、人間は一度も耳にしたことのない言語表現をも習得しているという事実を説明するためには、言語知識・能力が生得的に備わっていると想定しなければならない、という議論である。さらに、概念の生得性についての Chomsky の次の発言は興味深い：

There is ... a recent issue of a linguistic journal that has a long detailed article trying to give the meaning of the word "climb". And it is very complicated. But every child learns it perfectly right away. Now that can only mean one thing. Namely, human nature gives us the concept "climb" for free. That is, the concept "climb" is just part of the way in which we are able to interpret experience available to us before we even have the experience. That is probably true for most concepts that have words for them in language. This is the way we learn language. We simply learn the label that goes with the preexisting concept.
(Chomsky 1988: 190-1)

たいていの単語が表す概念は予め生得的に決まっいて、幼児は言語習得の過程でその概念がその言語においてどの単語によって表されているのかを学ぶだけである、という Chomsky の主張は、"bureaucracy" などの特定の段階以降に生じた概念の場合直ちに問題が生じる（坪井 1993: 81）。

これらの主張は生得性に過大な役割を負わせた結果であると思われる。何もない状態からは何も生まれないであろうが、言語能力やすべての概念が生得的に備わっていると考えるのではなく、概念化の能力といった一般認知能力を人間はもって生まれてくると考えることは十分に可能である。そのように考えなければ、子どもはあらゆる文化の中に存在するあらゆる概念や、現在は存在しないが将来存在することになる概念さえももって生まれてくるといふ信じがたい仮説を立てることになるのである。このような仮説を Lakoff(1987:335)では、人間が現に持っているような概念を持つのはなぜかということや、人間が持ちうる概念体系の範囲がこのようなものであるのはなぜかということを説明できないと批判している。3 章で詳しく述べるところであるが、人間は自らの持つ身体の性質というものに動機づけられて概念形成以前に基本的な概念構造を与えられる。

そして、この概念構造を基盤として概念カテゴリーを拡張し、より複雑な概念を習得してゆくと考えられる。その際に、人間は、メタファーという想像的能力を用いている。つまり、人間に生得的に備わっているのは、このような概念構造を形成し、拡張するといった一般認知能力なのである。

生成文法による言語能力の一般認知能力からの自律性や生得性の主張は、ともに人間の持つ一般認知能力を無視した結果である。このような主張の問題点はすでに指摘したが、それに加えて重要なものとして、言語のあらゆる側面に見られるカテゴリー化の現象、プロトタイプ効果といった一般認知の傾向の反映を説明できないという点が指摘できる。これについては、後で説明する。

2.3. 文法の自律性とその問題点

生成文法では、名詞や動詞といった文法的カテゴリーや、主語、目的語といった文法関係は意味から自律していると主張している。この主張は生成文法の理論における暗黙の前提となっている。この自律性の主張の一応の根拠としてよく挙げられる英語の受動文（例えば、*The door was painted (by Bill)*）と能動文（例えば、*Bill painted the door*）という構文のペアを例にとって考えてみよう。生成文法では、この二つの構文間の関係を目的語の *the door* を主語の位置へと移動するという「変形」といった、意味とは直接関係のない形式的規則によって説明できるものと考えてきた（最近の生成文法における受動文の生成メカニズムに関する説明には変化は見られるが、文法と意味の関係についての基本的な考え方は変わっていないものと思われる。最近の説明については Cowper (1992) を参照のこと）。この考え方については西村（1996）において非常にわかりやすく紹介と問題点の指摘が行われているため、以下の議論は主として西村（1996）に基づいて進める。

上の能動文と受動文のペアは書き換え（*paraphrase*）の関係にあり、書き換えの前後で文の意味が同一であるという前提がある。もしこの前提が正しいとすると、「文法」は「意味」から自律しているという考え方が妥当であることになる。「意味」を同一に保ったまま「文法」構造を規則的に変化させることができるということは、「意味」から自律した「文法」の規則や原理の存在を示唆するからである。そして、受動文と能動文の意味が同一であるとしたら、主語や目的語といった文法関係を意味に基づいて特徴づけることが不可能になる。主語と目的語がそれぞれ行為の主体と行為の対象といった

意味役割に対応していないことになるからである。このような議論は、受動文と能動文といった、異なる文法形式を示すペアの「意味」が等しい、という前提に基づくものである。そこで検討すべき点は、このような対応を示す文法は、本当に「意味」が同じなのか、ということである。

能動文と受動文のような構文間の「意味」が同じである、という場合の「意味」とはどのような性質のものなのであろうか。両構文の意味が同じであるという主張の根拠として挙げられるのは、両構文が同じ状況を描写するのに用いられうる、という事実である。表現主体である人間から独立して存在する表現対象としての状況に内在すると考えられる「意味」は、「真理条件的意味」と呼ばれているが、この「意味」は、表現対象としての状況が与えられれば、表現主体の主観とは関係なく一義的に決定されるという点で、「客観的」な性質のものであると言える。要するに、生成文法における文法の自律性のテーゼは、客観主義的意味観に根差しているのである。この客観主義的な意味観については、Lakoff(1987)において哲学的諸問題を含めて詳細に検討され、学問的レベルで批判がなされているが、ここでは引き続き西村(1996)で行われている説明に基づいて客観主義的な意味観の問題点を指摘しておこう。次に挙げる例は、言語表現の意味分析を真理条件的なレベルだけで行ったのでは不十分であること端的に示すものである：

- (1) a. The path slopes steeply up from the bank of the river.
- b. The path slopes steeply down to the bank of the river.

上のペアが描写しているのは確かに「客観的」には同じ状況であるが、そこから両者の「意味」が同じであるという結論を下すわけにはいかない。それでは、上のような表現ペアの「意味」の相違はどこに求めればよいのであろうか。それは表現主体である人間による表現対象としての状況の「捉え方」(どのような視点から状況を眺めるか、何に焦点を合わせるか、どのような前提に基づいて事態を解釈するか)の違いを求めることができるであろう。何らかの状況を描写する場合には、人はその状況に対して複数の異なる「捉え方」をする可能性があり、そのような異なる「捉え方」に対応して「意味」の異なる複数の表現形式(文法形式)が存在していると考えられる。この考え方は、3章で詳しく論ずる“symbolic view of grammar”につながる。客観主義的意味論では、

一つの状況を描写するために、なぜそのような複数の表現が存在しなければならないのか説明することはできない。

先に「真理条件的」に意味が等しいとされた能動文と受動文については、次のような事態の異なった「捉え方」に基づく「意味」上の対立があると考えられる。

Bill painted the door という能動文は、ビルのドアに対する〈行為〉として事態を捉えている。〈行為の主体〉の方が〈行為の対象〉よりも注目されやすいという一般的な傾向を考えれば、前者を中心とした〈行為〉としての事態の捉え方はごく自然であると言える。それに対して、The door was painted by John という受動文は同じ事態をドアの被る〈変化〉に焦点を合わせて捉えている。一般的な傾向に反して〈行為の主体〉を差し置いて、〈行為の対象〉に中心的な地位を与えているという点で、この捉え方には特異性があると言える。能動文と比べた場合の受動文の形式の複雑さはこうした「意味」の特異性の反映であると考えられる。

以上により、生成文法が文法の意味からの自律性を主張する場合の基盤となる客観主義的意味観の問題点が示され、文法の自律性の主張は根拠のないものであることが明らかになった。生成文法による、「言語は規則と原理によって生成される意味解釈のあたえられていない純粹に形式的な文法体系」という考え方は、直観的にみても奇妙なものである。Lakoff(1987: 228)においても指摘されているとおり、言語の本来の目的は思考に形を与えて表現し、伝達することであって、解釈を与えていない音声の連続を生み出すことではない。したがって、文法の多くの側面は表現される思考に依存しているはずである。生成文法における言語観の問題点を一言で言うならば、思考し表現する人間の存在の軽視である。

3. 認知言語学からの代案

3.1. 概略

すでにその問題点を指摘した生成文法と対立する言語理論として出現した認知言語学の特徴は、「言語と認知に関する哲学、心理学などの関連諸分野の思索（たとえば、後期 Wittgenstein の言語論）や研究成果（たとえば、Rosch のカテゴリー理論）を積極的に取り込みながら、広範で多様な言語現象にたいする本質的な説明を自然に可能にする理論体系を構築しつつある」（西村 1995: 235）ところにある。前章で指摘したような生成文法の問題点は、「言語は一般的認知機構から自律した形式的システムである」と

いう絶対的前提を立ててしまった点にあったのに対し、認知言語学では、言語は一般的認知機構を利用していると考えため、生成文法において生じたような問題は生じない。そして、認知に関する関連諸分野の研究成果を積極的に取り込むことが可能なため、極めて学際的な理論を構築することができる。また、我々が直感的に抱いていると思われる言語観と矛盾しないばかりでなく、より広範な言語現象を詳細に説明することができるという点で、従来の理論に対する優越は実証されてきている。具体的な分析については後で紹介するとしよう。

3.2. 認知に基づく言語

はじめに、認知言語学が取り込んだ関連分野の研究成果として最も重要なものと言える、Rosch(1973a, b, 1975a, b, 1977 etc.)によるカテゴリー理論を簡単に紹介しておこう。古典的カテゴリー理論では、カテゴリーを決定する属性はすべての成員によって共有されるとするため、カテゴリーを構成するすべての成員は同等の地位を有することになる。これに対して、Roschは、1960年代後期から1970年代後期にかけての心理学的研究を通して、人間はカテゴリーのある成員を他の成員よりも典型的であると判断する傾向がある（プロトタイプ効果と呼ばれる）ことを確認した。鳥のカテゴリーに見られるプロトタイプ効果に関するRosch(1973b)の研究成果を例にとって見てみよう。Roschは、実験を通して、被験者はすべての鳥を「鳥らしさ」に関して同等であるとみなすのではなく、コマドリやスズメを「典型的な鳥」とみなし、フクロウやペンギンは「典型性の低い鳥」として見るということを確認した。つまり、鳥のカテゴリーの成員は、典型的な成員から典型性の低い成員まで段階的である「プロトタイプカテゴリー」を形成するというを示した。このようなプロトタイプ効果は、人間の有する様々な概念構造（たとえば因果関係（cf. Lakoff and Johnson 1980: 69-76; Lakoff 1987: 54-55））に観察されるという点で重要である。

このようなプロトタイプ効果は、非言語的な概念構造だけに生ずるのではなく、言語構造にも生ずる。この事実は、言語構造が一般認知機構に基づいているという主張につながる。ここでは、Lakoff(1987: 68-69)で挙げられている言語におけるプロトタイプ効果の存在を示す事例を見てみよう。

カテゴリー内にみられるプロトタイプ効果は、言語学では有標性という言葉を用いて論じられる。英語の数というカテゴリーを考えてみよう。複数には、boysに見られるよ

うに形態素 *-s* という「標識」がある（つまり、「有標」）が、単数には、*boy* に見られるように、「標識」が欠如している（つまり、「無標」）。このことは、単数の方が複数よりも認知的にみて単純であり、その認知的な単純さがそのより短い形という単純さに反映されているという形で説明される。

このようなプロトタイプ効果は言語のあらゆる側面、音韻論、形態論、統語論、意味論にわたって見られる。特に、統語論では、名詞、動詞といった統語論的カテゴリーや、受動態といった文法構文といったあらゆる側面にプロトタイプ効果が現れることが示されている。後で具体的な分析の中で示すが、文法構文はプロトタイプに基づく放射状カテゴリーを形成し、中心的構文と周辺の構文がある。

このような言語のあらゆるレベルに見られるプロトタイプに基づくカテゴリー化は、一般認知機構から言語を自律させる生成文法においては説明不可能な現象である。認知言語学による「言語は認知機構を利用している」という主張は、言語にみられるプロトタイプ効果を示す研究の積み重ねによって実証されてゆくであろう。

これまで議論してきたプロトタイプ効果はどこから生じるのであろうか。認知言語学では、人間は理想認知モデル (*idealized cognitive model*、略して *ICM*) を用いて知識を組織化し、カテゴリー内に見られるプロトタイプ効果はそうした組織化から生じると考える。この認知モデルの出所として体系的なものとして、Fillmore(1982)によるフレーム意味論、Lakoff and Johnson(1980)によるメタファーとメトニミー理論、Langacker(1987, 1991) による認知文法、Fauconnier(1985)によるメンタル・スペース理論、Talmy(1985)による *Force Dynamics* などがある。

それでは *ICM* とは何か、概念化においてどのような役割を果たすのか、ということを示す具体的な例を一つ挙げておこう。英語の *bachelor* という名詞は、独身の成人男性と定義されるが、この定義は結婚と典型的な結婚年齢が決まっている人間社会に関する *ICM* との関連でのみ意味をもつ。この *ICM* と合致する独身成人男性は *bachelor* と呼ばれるであろうが、ローマ教皇や、ジャングルに捨てられ人間社会と接触することなく成長した独身男性は、少なくとも *bachelor* というカテゴリーの代表的な成員とは言えないであろう。このような理解は、*ICM* なくしては成り立たない。

上で挙げた例は概念的なものであるが、言語が概念化という認知プロセスと結びつくとき次節で詳しく説明する文法の記号論的な見方が生じるのである。言語がそのような認知プロセスと結びつくことによって言語のあらゆる側面に見られるプロトタイプ効果

といったカテゴリー化の現象が説明されるのである。

前章で、生成文法の生得性に関する主張の問題点を指摘した際に多少触れた「人間は概念化能力といった一般認知能力をもって生まれてくる」という認知言語学による主張を、ここでもう少し詳しくみておきたい。人間には人間のもつ身体的性質に動機づけられて概念形成以前の原始的なイメージ・スキーマを形成する能力がある。そして、このイメージ・スキーマがメタファー的に用いられることによってカテゴリーが形成されるのである。具体的に言うと、物理的領域に構造を与えるイメージ・スキーマが、それに対応するより抽象的で理解が困難な領域にメタファー的に写像されることによって概念は構造化されるのである。例として、＜容器＞のスキーマをとりあげてみよう(cf. Johnson 1987, Lakoff 1987)。このスキーマは「内部」と「外部」を区別する「境界」から成り立ち、われわれが自らの身体を容器として理解していることから生じる。人間にとって最も基本的な経験は、摂取と排出であり、空気を取り入れて吐き出すといったことである。われわれは＜容器＞という観点から非常に多くの日常経験を理解している。そして、この摂取と排出といった物理的、身体的な経験から生じるスキーマに基づく理解が、メタファー的により抽象的な領域に拡張されることにより、抽象的な経験を理解することが可能となるのである。例えば、「何かを考え出す」というような言語表現の存在も、思考を＜容器＞という観点から捉えることにより自然に理解できる。重要な点は、カテゴリー化に関わる基本的でプロトタイプ的なカテゴリーの成員から周辺的な成員への拡張というものは、恣意的なものではなく、人間の身体的経験などによって動機づけられている、ということである。

3.3. Symbolic View of Grammar

生成文法では、名詞や動詞といった文法的カテゴリーや、主語や目的語といった文法関係、構文（たとえば、受動文、能動文）は、意味から自律しており、意味に基づいて説明することのできないものと想定されていたのに対し、認知言語学では、文法の意味からの自律性は認められていない。つまり、文法構造はある種の意味構造を具現化(symbolize)するものとみなされるのである。したがって、文法構造が異なれば意味構造も異なり、意味構造が異なれば文法構造も異なると言える。このような新しい認知的文法像は Langacker(1987, 1991 etc.)によって体系化されている。Langacker による文法観を顕著に示す一節を引用しておく：

Meaning is what language is all about; the analyst who ignores it to concentrate solely on matters of form severely impoverishes the natural and necessary subject matter of the discipline and ultimately distorts the character of the phenomena described. But it is not enough to agree that meaning is important if this results, say, merely in positing a separate semantic “component,” treating grammar separately as an autonomous entity. I contend that grammar itself, i.e. patterns for grouping morphemes into progressively larger configurations, is inherently symbolic and hence meaningful. Thus it makes no more sense to posit separate grammatical and semantic components than it does to divide a dictionary into two components, one listing lexical forms and the other listing lexical meanings. Grammar is simply the structuring and symbolization of semantic content; for a linguistic theory to be regarded as natural and illuminating, it must handle meaning organically rather than prosthetically.

(Langacker 1987: 12)

このような文法観は、認知的な意味観があつてはじめて可能になる。生成文法の文法観の問題点を指摘した際にも触れたが、例えば、対応する能動文と受動文がたとえ同じ状況を描写することができても（つまり「真理条件的意味」が等しくても）、互いに異なる意味構造（能動文は<行為>としての捉え方、受動文は<変化>としての捉え方）に基づいており、それに伴って文法構造も異なる、という議論は、言語表現の意味は客観的な現実内に内在するという「客観主義的意味観」に立つのではなく、言語表現の意味は表現者による状況の解釈の仕方（どのようなイメージで捉えるか）といった認知プロセスを慣習化された形で含んだものであるという「概念主義的意味観」に立つことによって可能になる。この概念主義的な意味観について若干の説明を加えておこう。先に、英語の *bachelor* という語の意味は、人間社会に関する一般的知識（「百科事典的知識」）との関連でのみ適切に理解できるということについて述べたが、このような認知モデルを用いた知識の組織化（概念化）が慣習化された形で意味に含まれているという意味観が「概念主義的意味観」と呼ばれるものである。

さて、このように「意味」を認知プロセスとの関連で規定し、文法形式は、このような「意味」に基づいて動機づけられていると考えることにより、「認知プロセスの反映

としての文法」という文法観が生じるのである。そして、文法的カテゴリー、文法関係、文法構文などを、認知的な装置（認知モデル、メタファーやイメージ・スキーマ、プロトタイプ理論）を用いた意味論に基づいて説明することが可能になるのである。これによって、従来恣意的とされていた様々な言語現象が、実は人間の認知の営みによって動機づけられているものとして説明することができ、言語研究の可能性が広がってゆく。

3.4. 事例研究—横山（1994, 1996）

ここでは、前節まで紹介してきた認知言語学的アプローチが言語現象をどのように説明するかを、具体的に示す目的で、私がドイツ語の *lassen* を用いた構文（以下 *lassen*-構文）の意味に関して認知言語学的視点から行った分析を簡潔に紹介する。

lassen-構文は、従来、使役として分析されてきた構文（以下、*lassen*-使役構文）と、出現頻度が低いためあまり注目されず、中間構文あるいは受動文の一種として分析されてきた構文（以下、*lassen*-中間構文）とに大きく分けて議論されてきた。両構文の具体例を挙げておこう：

lassen-使役構文： 強制の使役： Karl *ließ* seinen Sohn den Brief abtippen.

Karl had his son the letter type

'Karl had his son type the letter.'

許可の使役： Karl *ließ* sie schlafen.

Karl let her sleep

'He let her sleep.'

Lassen-中間構文： Das Buch *läßt* sich leicht lesen.

The book let itself easily read

'The book reads easily'

ここで、従来両構文が意味的関連性のない異なる二つの構文であると分析されてきた理由は、従来の研究が「客観主義的意味観」に立って分析してきたことにあると考えられる。それによると、*lassen*-使役構文ではその主語（上の例では、Karl）が「息子に手紙をタイプさせる」、「彼女を眠らせておく」という一種の使役行為を行う使役主（動作主）であるとみなされるのに対し、*lassen*-中間構文の主語（上の例では、das Buch）

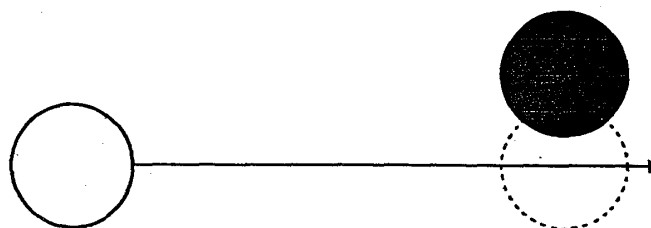
は、人間の「読む」という行為の対象（被動作者）であるとみなされる。したがって、両構文はその主語の性質において決定的に異なるとされてきたのである。

しかし、本研究では、文法構文の言語形式は意味から自律しておらず、認知プロセスとの関連で規定される意味に基づいて動機づけられている、という認知論的言語観に立ち、文法形式において一致している両構文の間には意味的関連性があるはずであると考え、従来真剣に取り組まれなかった問題、つまり、lassen-使役構文と lassen-中間構文の意味的関係をどのように説明しうるかという問題に、両構文の主語の性質に視点をおいて取り組んだ。

本研究では、lassen を用いた構文は、プロトタイプに基づく放射状カテゴリーを形成すると想定する。このカテゴリーは、中心的な構文と非中心的な構文からなり、非中心的な構文は中心的な構文との関連（家族的類似性、メタファー的マッピング）によってそのカテゴリーの成員としての資格を与えられている。そして、非中心的な構文の形式と意味の対応は、より中心的な構文の形式と意味の対応によって動機づけられていると考える。

lassen-構文のプロトタイプは何か？lassen-構文では、強制の使役よりも許可の意味をもつと解釈される文の出現頻度が高く、lassen-構文が使役としてよりも許可として解釈される傾向があること、及び、通時的にみると lassen-構文が元来許可の意味をもっていたことから、許可の意味がこの構文の中心的意味であると考えられる。lassen-構文は、この中心的意味から強制の使役をコード化する方向と、中間構文で表されるような状況をコード化する方向へと拡張すると想定する。

この中心的意味は、以下に示すようなイメージ・スキーマを構成原理とする認知モデルによって説明される。Talmy(1985)の force dynamics (二つ以上の物がその力に関してどのように作用し合うか) に基づき、lassen-構文における不定詞で表される出来事と主語によって表される主体との関係を、図1に示すような力のダイナミックスの関係とみなす：



(図1)

不定詞で表される出来事（白まる）は実現する潜在的傾向をもつが、その実現、非実現は *lassen* の主語（黒まる）によってコントロールされている。つまり、*lassen*-構文の主語はコントローラーとして働いている。出来事の実現は、コントローラーが障壁として機能する（黒まるが点線のまるの位置にある）場合には阻止される。一方、図1の場合のように、コントローラーが障壁として機能しない場合には出来事は実現する。重要なのは、プロトタイプの *lassen*-構文の主語が、不定詞で表される出来事の実現、非実現をコントロールしている、ということである。ここで次のようなプロトタイプの *lassen*-構文を見てみよう：

(2) Er hat das arme Tier einfach verhungern lassen.

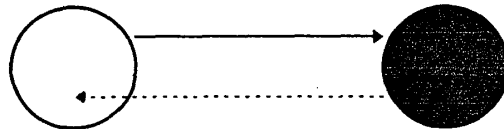
'He let the poor animal just starve to death.'

「動物が飢え死にする」という不定詞で表される出来事は、主語である「彼」によってえさを与えられなければ実現する潜在性をもつ。主語は、この潜在性の実現を妨げることができるとみなされる。よって、主語はこの出来事の実現、非実現をコントロールしていると言える。

このプロトタイプの *lassen*-構文を中心とするこのカテゴリーは、一方では強制の使役をコード化する方向へ、もう一方では中間構文で表される状況をコード化する方向へと拡張する。強制の使役への拡張は、主語のコントロール力が積極性を増し、本来実現への潜在性をもたない出来事をも引き起こす（例えば、何かをすることを嫌がっている人に何かを命令してさせる、というような場合）という状況も、*lassen* の主語がコントローラーであるというプロトタイプの *lassen*-構文との共通性に動機づけられて生じたものであると説明できる。

本研究で重要なのは、中間構文で表されるような状況をコード化する方向へのカテゴリーの拡張をどのように説明するかである。ここでは、*lassen*-中間構文も、プロトタイプの *lassen*-構文同様、コントローラーとそれに対峙する力のダイナミックスの関係に基づいて説明できると考える。客観的には *static* である *lassen*-中間構文の表す事態は、*force dynamics* によって構造化されることにより、力の相互作用のある *dynamic* な事態として概念化されると考えるわけである。この構文に典型的に現れる副詞が、*leicht* 'easily', *angenehm* 'comfortably' といった、不定詞で表される行為を人が実行しよ

うとする際に経験する難易や快不快を表すものであるということは、この構文の表す属性（上で挙げた例 'Das Buch läßt sich leicht lesen' でいうならば、本が読みやすいという属性をもつことを表す文ということになる）が、不定詞によって表される行為を実行しようとする人間と主語で表される物との相互作用によって規定されることを示している：



(図 2)

属性をもつ主語（黒まる）は、不定詞で表される行為（この行為を実行しようという人間の意志により、実現する潜在的可能性をもつ出来事とも言える）（白まる）が実行できるか否か、どのように実行できるかをコントロールしているとみなされる。つまり、主語は、行為を実行しようとする人間の経験の質を決定している。次の例は、従来 lassen—中間構文と客観的意味が同じとされてきた受動文の場合と異なり、前者では、行為を実行しようとする人の経験が、主語の属性のコントロールの範囲を越えた状況により決定されてはならないことを示す：

(3) Das Buch läßt sich nicht lesen. —

the book let itself not read

a. Es ist voll von Fachterminologie. 'It is full of technical terms.'

b. *Es liegt noch in der Binderei. 'It is still in the bindery.'

(4) Das Buch kann nicht gelesen werden. —

'The book can not be read.

a. ?Es ist voll von Fachterminologie.

* : 不適格文

b. Es liegt noch in der Binderei.

? : ほぼ適格

「本を読めない」という人間の経験が、「専門用語が多い」という本の属性によって決定されている場合（3a）には、lassen-中間構文は用いることができるが、その経験が「本がまだ製本所にあるから」という本そのものの持つ属性とは関係のない状況によっ

て決定されている(3b)のような場合には、lassen-中間構文は不適切ということになる。一方、受動文は、どちらの場合にも用いることができる。むしろ、本そのものの属性が問題となる場合よりもそれが関係ない場合の方が適切といえる。

このほか、lassen-中間構文の意味に関する本研究の分析の正しさを裏付ける言語データは存在するがここでは省略する。

以上の議論は、lassen-中間構文の主語が、プロトタイプの lassen-構文の主語同様、コントローラーとして捉えられていることを示すものである。したがって、中間構文で表されている状況が、プロトタイプの lassen-構文と同じ文法形式によってコード化されていることも自然に説明できる。lassen-使役構文も lassen-中間構文も、プロトタイプの lassen-構文からの拡張として議論することにより、両構文の意味的関連性を示すことができた。

このような説明は、客観主義的意味観に立ち、文法形式が意味から自律したものとみなし、人間の認知プロセスを言語研究から排除した従来の理論では不可能であろう。文法形式と意味との重要な結びつきに着目し、認知プロセスを反映するものとして言語を分析するという認知言語学的アプローチによってはじめて可能となるのである。

4. 認知言語学の本質とは？

1章で、認知言語学には互いに異なる複数の枠組みが存在し、その枠組みそれぞれを認知言語学と認めるとすれば、本稿で私が「認知言語学」と呼ぶものは、あくまでその内の一つということになる、ということを述べたが、ここでは「認知言語学」という看板を掲げているにもかかわらず主張の異なる枠組みをめぐる問題について若干触れておきたい。

本稿でのこれまでの議論では、生成文法と認知言語学は、互いに相容れない対立する理論として紹介してきた。生成文法では、言語能力は一般認知能力から独立しており、文法は意味から自律した純粋に形式的規則と原理から構成される体系として捉えられているのに対し、Langacker に代表されるような認知言語学では、言語は一般認知能力を基盤としており、文法は意味に基づいて動機づけられていると主張している。このような主張の背景には、生成文法が客観主義的意味観を前提としているのに対し、認知言語学では概念主義的意味観をとっているという、異なる意味観があった。このような主張をみる限り、両理論はすべての点で対立している。

ところが、この両理論を統合しようと企てるアプローチが存在する。Jackendoff(1983 etc.), 中右 (1994) などでは、概念主義的意味観をとっているにもかかわらず、文法は意味から自律していると主張されている。つまり、客観主義的意味観ではなく概念主義的意味観をとっているという点では認知論的であるが、文法は意味から自律していると主張している点では生成論的なのである。

ここで、次のような疑問が生じる：生成論と認知論は統合可能なのか？「認知言語学」は、生成論とは完全に対立する最も認知的な理論から、生成論における大前提を保持しつつ認知的な意味観も採り入れる理論まで段階性のあるプロトタイプカテゴリーを形成するのか？

まず、概念主義的な意味観をとりつつ、文法が意味から自律していると主張することが可能なかどうか考えてみたい。すでに見たように、文法構造は意味構造を具現化 (symbolize) するものであるという *symbolic view of grammar* は、概念主義的意味観があってはじめて可能になるものである。しかし、概念主義的意味観をとれば必然的に *symbolic view of grammar* を主張しなければならないか、という点必ずしもそうとは言えないようである。そもそも生成文法では文法の意味からの自律を前提として理論が構築されていた。もちろんすでに見たように、客観主義的意味観に立ち、文法形式が異なるにもかかわらず (真理条件的) 意味は同じであることを示す言語現象の存在が、文法を意味から説明することはできないという結論に至る根拠としてあった。この根拠は、概念主義的意味観に立てばなくなるわけであるが、はじめに「文法の意味からの自律」を前提としておいて、その文法から自律した意味は、概念的に定義されるものと主張することは不可能ではない。

次に問題となるのは、概念主義的意味観をとりつつ、文法の意味からの自律を主張することによってどのような理論的メリットがあるのかどうか、生成論と認知論を統合することによって、プロトタイプの認知論に立つ場合よりも何らかの説明力の強化がみられるのかどうか、ということがある。私の考えでは、すでに十分な説明力を有する認知言語学にとって、文法の意味からの自律という生成文法的言語観を採り入れることに何らかのメリットがあるとは思えない (Jackendoff による概念主義意味論に対する認知意味論の優越は坪井・西村 (1991) において実証されている)。むしろ、文法カテゴリー、文法関係などにみられるカテゴリー化の現象など多くの言語現象が、文法を意味から自律したものと考えることにより説明不可能になるであろう。認知言語学の最大の長所は、

言語が恣意的な、形式的な文法規則によって記述すれば十分な自律的な存在なのではなく、人間の認知の営みによって意味的に動機づけられており、従来恣意的なものとして説明がされなかった多くの側面を説明できるようになった点にあると思われる。

私は、このように認知論と生成論の統合に関しては懐疑的であるが、この問題は非常に難しい問題であり、実証的な分析の積み重ねによって明らかになるものであろう。より理論的に負担なく、人間の言語に対して抱く直観に反することなく、自然により多くの言語現象を説明できる理論こそ将来の言語研究に必要なのである。

5. おわりに

異なる言語の話し手でも、人間である限り基本的には同じ身体的性質を持っていることから、人間の認知の傾向にはある程度普遍性がみられるはずであり、その認知的傾向性は言語に反映されているはずである。一方、人間の経験は、文化的、社会的背景に応じて違いがあることから、何らかの認知的個別性も見られるはずで、その認知的個別性は言語構造の違いとして現れるはずである。したがって、人間の認知の営みと言語の関係に着目する認知言語学の枠組みで個別言語を分析、対照することは、非常に興味深い。認知言語学の有効性もそのような地道な言語分析を通して実証されてゆくであろう。

【謝辞】

4章における認知言語学内にみられる異なる枠組みをめぐる問題をまとめるにあたっては、東京大学の西村義樹氏、慶応義塾大学の篠原俊吾氏、筑波大学の小早川暁氏による電子メール上の議論によって大いに啓発された。また、電気通信大学の坪井栄治郎氏にも非常に参考になる資料をお送りいただいた。ここで深く感謝の意を表したい。

【参考文献】

- Chomsky, Noam (1955) "Semantic Considerations in Grammar". Monograph No. 8, Georgetown Monograph Series.
- (1977) *Essays on Form and Interpretation*. Amsterdam: North-Holland.
- (1988) *Language and the Problems of Knowledge*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Cowper, Elizabeth A. (1992) *A Concise Introduction to Syntactic Theory: The Government-Binding Approach*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Fauconnier, Gilles (1985) *Mental Spaces*. Cambridge, Massachusetts: MIT Press.
- Fillmore, Charles (1982) "Frame Semantics." In Linguistic Society of Korea, ed., *Linguistics in the Morning Calm*: 111-138. Seoul: Hanshin.
- Jackendoff, Ray (1983) *Semantics and Cognition*. MIT Press.
- Johnson, Mark (1987) *The Body in the Mind*. Chicago and London: University of Chicago Press.
- Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things*. Chicago and London: University of Chicago Press. (池上嘉彦、河上誓作 他 (訳) 『認知意味論』紀伊国屋書店、1993)
- Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: University of Chicago Press. (渡辺昇一 他 (訳) 『レトリックと人生』大修館書店、1986)
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1. Chicago: University of Chicago Press.
- (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 2. Chicago: University of Chicago Press.
- 中右 実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店.
- Newmeyer, Frederick J. (1983) *Grammatical Theory*. Chicago: University of Chicago Press.

- 西村 義樹 (1992) "Remarks on the Autonomy Issue (I)." *Proceedings of the Department of Foreign Languages and Literature, College of Arts and Science, University of Tokyo*, vol. 40, no. 3: 78-101.
- (1995) トピック 8 認知言語学. 大津由紀雄編『認知心理学 3 言語』東京大出版会: 235-237.
- (1996) 『英語の意味』大修館書店.
- Rosch, Eleanor(Eleanor Heider) (1973a) "Natural Categories". *Cognitive Psychology* 7: 532-547.
- (1973b) "On the Internal Structure of Perceptual and Semantic Categories". In T.E. Moore, ed., *Cognitive Development and the Acquisition of Language*. New York: Academic Press.
- (1975a) "Cognitive Reference Points". *Cognitive Psychology* 7: 532-547.
- (1975b) "Cognitive Representations of Semantic Categories". *Journal of Experimental Psychology: General* 104: 192-233.
- (1977) "Human Categorization". In N. Warren, ed., *Studies in Cross-Cultural Psychology*. London: Academic.
- Talmy, Leonard (1985) "Force Dynamics in Language and Thought". In *Papers from the Parasession on Causatives and Agentivity*. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- 坪井 栄治郎 (1993) 「自律的体系としての言語」再考. 『電気通信大学紀要』第 6 巻. 第 1 号: 79-96.
- 坪井 栄治郎・西村 義樹 (1991) 認知意味論と概念意味論. 『実践英文学』第 39 号: 23-37.
- 横山 真樹 (1994) A Cognitive Approach to the Semantics of German *lassen* Constructions: Causatives and Middles. MA thesis. University of Tokyo.
- (1996) "Zur Semantik der *lassen*-Konstruktion — Ein kognitivsemantischer Versuch—." 『ドイツ文学』第 96 号: 136-144.